





白蓮
水ん
水ん
水ん

林真理子

白蓮れんれん

一九九四年一〇月二〇日 初版印刷
一九九四年一〇月三〇日 初版発行

著 者 林 真理子

発行者 嶋 中行雄

印刷所 精興社

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八
振替 〇〇一二〇一四一三四

© 1994 CHUOKORON-SHA, INC

Mariko HAYASHI

Printed in Japan

ISBN4-12-002372-9

JASRAC 田 9463061-401

白蓮れんれん
目次

第一話	花嫁御寮	7
第二話	女教師	21
第三話	ミッションスクール	36
第四話	籠の鳥	52
第五話	鸚鵡の庭	69
第六話	希望	85
第七話	初夜	101
第八話	踏絵	118
第九話	醜聞の後	134
第十話	待ち人來たる	149
第十一話	往復書簡	166

第十二話 京の雨

第十三話 芝居の日

第十四話 双生児

第十五話 降誕祭

第十六話 トランプ

第十七話 恋人たち

第十八話 京の蟬

第十九話 決行

第二十話 最終章

あとがき

参考文献

184

201

218

235

251

268

283

300

317

336

337

装幀・装画 池田満寿夫

白蓮れんれん

第一話 花嫁御寮

筑豊の山々はどれも低いが明瞭ではない。春ならば青味を帯び、秋ならば紫に近く靄がかかっている。それを他所から来た人々は、隆盛を誇る鉾山ヤヤマからの煤ゆえかと感心するのであるが、このあたりは昔から光がもやっていたと土地の者は言う。それでも鮎が釣れた付近の川も、昨午外国製の水洗選炭機が設置されて以来、薄く墨を染めた色に変わった。羽織を脱ぐ陽気になるにつれ、風景は薄紙がかかる。山も川もとろとろと、やわらかくけぶって見えるようになったのは、やはりこの数年のことかもしれぬ。

直方のうがた高等女学校に通う初枝は、さきほどから家の前にたたずんでいる。秋の終わり頃には、小作人の積む米俵で満たされる土間のあたりも白い光が踊っていて、人が見ればこのいい日よりに陽なたぼこをしていると思われるかもしれない。だが初枝が大層緊張していることは、固く握った銘仙の袂たもとでわかる。

大柄なことが伊藤の家の特徴であったが、初枝も十六歳にしては背丈があり、涼やかに張った目元のあたりが大人びている。先代の伝六が還暦近くなってから、器量よしの村娘に生ませた娘

だ。あと二、三年で相当の玉になる、などと伊藤の家に出入りする男たちが野卑な冗談を言うこともある。

が、もちろんそんな言葉は陰でこっそりと囁かれた。伝六の時代ならともかく、息子の伝右衛門が家督を継いでからこの十年、伊藤の家はすっかり長者の風格を身につけた。いくら荒っぽい川筋の男たちでも、そんな戯れ言を口にするとはもはや憚られるのである。

伝六が魚屋をしていた屋号のなごりで、「問い屋の嬢ちゃん」と呼ばれる初枝は、袂を握ったまま背伸びするように通りの向こう側を見た。幸袋こうぶくろの中でも「町」と称せられるこのあたりは、雑貨屋や八百屋がいくつか軒を並べている。豆腐屋の親父が飼っている鶏が、しきりに地面をついばみながら行ったり来たりしているが人影はない。左側を曲がると駅はすぐ近くにあるのだが、何らざわめきも伝わらず、町は昼下がりを少し過ぎたあたりの静けさを未だに保っている。

「汽車が遅れとるんじゃないか……」

しかし土間を抜けて家の中に引き返し、誰かに尋ねることは出来なかった。主人の伝右衛門を出迎えるために男たちは出払っている。女たちだけが残り立ち働いている家の中は、奇妙な冷やかさが漂っていて、それを初枝は敏感に察している。母親が他所へ嫁いだことにより本家に引きとられた初枝は、幼い頃からまわりの大人たちの顔色をうかがっているところがあるのだ。

主人の伝右衛門が嫌うこの悪癖を身につけているのは初枝だけではない。伝右衛門自身が知合いの娘に手をつけて生ませた静子も、同じように上目遣いに人を見てはよく叱られる。そうはいうものの、小学校六年生の静子は子どもの無邪気さを多分に残していて、何の屈託もなく大人たちと小竹の駅に出かけていってしまった。

伝右衛門が東京から花嫁を連れて帰ってくる。その日は学校を休み、二人を出迎えるようにという伝言を一緒に聞いた。しかし静子の方は小竹まで行き、自分はこうして家の前にたたずんでいる。この心根の差が、もはや家つき娘となった静子との違いを示しているようで哀しい。自分はいくらにいたいどうなるのだろうかという不安は、娘盛りを迎えようとしている初枝の胸を暗くおおい、時には息苦しくさえるする。

「相手は華族のお姫さんちゃうじゃないか」

父違いの弟の手をひいて、こっそり裏口から訪れた母親のユキは言ったものだ。

「ああいう人はな、私らみたいな者のことは虫ケラみたいに思っとるでな、ああたもよく気づけな駄目だよ。悪かこたすると、ああたもお스가さんみてえになっちまうだよ」

同じように伝六の娘でも、他の女の連れ子で血の繋がっていないスガは、女学校に行くことなく上女中のように暮らした後、おとし土地の小庄屋の男とひっそり婚礼をあげた。

「静しゅんは何ちゅうても伝ネムさんの実の娘ばい。ああたは妹っていても腹違いで年も離れとる。今度の奥さまにもよっぽど気に入られるようにせにゃいかん。人間はな、明日どうなるかわからんもんや、そんでもな、悪いことがこっち来んよう、来んよう一生懸命やらないかん」

最近ある宗教に凝っているユキは、初枝にものを言う時におかしな節をつける。それはおどろおどろしく卑屈で、初枝に恐怖を与えるに十分であった。

もうじき華族のお姫さんがやってくるという。初枝は華族というものを見たことがない。初枝ばかりでなく、この村の誰もが目にしたことがないはずだ。

初枝がただわかつているのは、華族というものは天皇の親戚だ、ということだけである。紀元

節や天長節の時になると、女学校の生徒たちは、真影の前で長いこと最敬礼をさせられる。鼻に水がたまり、もう限界だと思われる時「御名御璽」という合図があり、生徒たちは顔を上げる。その時にもう白いカーテンは閉められ、天皇と皇后の写真は見えない。一度上目遣いで見た友人の話によると、天皇は髭を生やして大層怖そうで、皇后は信じられないほど美しいお顔をしていたそう。いずれにしても初枝たちは写真を見ることがかなわず、それに触れる時、校長先生はフロックコートを着て白い手袋をはめる。そうした人の親戚の女が、今日からこの家に住むなどということ、どうしてにわかに信じる事が出来ただろう。そのお姫さんは今日から初枝とひとつ屋根の下で眠り、一緒に飯を食い、同じ便所を使うというのだ。

そんなことが本当にありえるのだろうか。もしかするとその身分の高いお姫さんのために、自分も召使いの座に落ちていくかもしれない。「問い屋の嬢ちゃん」から、おスガさんのように気軽にものを言いつけられる存在になっていくかもしれない。

十六歳の初枝はまだ運命という言葉を知らなかったが、それでも自分の身の上が大きく変わろうとしているのが今だ、ということははっきりとわかる。昨年の五月、ハレー彗星が来ると世の中が騒いでいた頃、伝右衛門の妻のハル子が長患いの末に息をひきとった。義理の姉ということになるが、母のユキよりもはるかに年上で気むずかしいところのあるハル子に、初枝はそう馴じんだ思い出がない。けれどもハル子さえ生きていてくれれば、こんな不思議な婚礼は起こらなかったのだ。

もうじき伝右衛門と新しい花嫁が駅に着く、そして今日から何もかも変わってしまうのだと思ったとたん、初枝はすんでのところで涙をこぼすところであった。それを途中でこらえたのは、

角の肥料屋を曲がり、豆腐屋の鶏を蹴散らすようにしながら、こちらに走ってくる少年が見えたからだ。着慣れない小倉の袴が、うまくさばかれず、時々少年はころびそうになる。伝右衛門の甥にあたる八郎であった。八郎は何からか必死で逃げるようにこちらに向かってくる。小竹の駅まで迎えに出かけた彼がこうして近づいてくるということは、伝右衛門と小竹まで迎えに行った人々を乗せた汽車が、幸袋駅に到着したということに他ならない。そういえばさっきまでと空気が違ふ。陽がやや翳^{かげ}つたのと同じくして、多くの人々の気配が風にのって伝わってきた。

「八郎ちゃん」

初枝は叫んだ。

「嫁しゃん着いたね、どんな嫁しゃんね」

「知らん」

八郎は初枝の前でも、門の前でも立ち止まることなく、そのまま走り抜けようとする。初枝はもしかしたら泣き出しそうな顔を見られたかもしれない照れもあって、八郎をつかまえようとした。

「これ、待ちんしゃい」

小学一年生の八郎は、女学生の初枝にたやすく腕をつかまれた。

「うち中みんなで待ちゃるとよ。ちゃんと言わんかね」

初枝は目を見張った。八郎の瞳が幼い怒りで燃えているのだ。風の中を走ってきたために頬が乾いてひび割れている。同じように埃で白くなった唇をゆがめて八郎は言った。

「俺は、あんな女、嫌いだ」

腕をふりほどくと、八郎は土間に向かって走り出す。それを合図のように、家の中から女中頭のサキをはじめとして、六人の女たちが出てきた。サキは洗いものでもしていたらしく、少しめくれ上がった袖から見える手首が、白くさえざえと輝いている。その美しくなった指でサキは衿をかき合わせ、ひどく間のびした声で叫んだ。

「ああ、嫁しゃんが来るわ、ほら、見えるわ」

豆腐屋の前に白い砂煙が立っている。十人ほどの男たちが群れ、もつれるように歩きながらこちらにやってくる。

ハル子姉さんの葬式の時みたいや、と初枝は思う。あの時も男たちはみな黒い紋付を着ていた。提灯や旗を持ち、声もたてず歩いていた。違っていることといえば、あの時男たちが取り囲んでいたのは白木の棺だったが、今は薄繚うすはだの被布を着た女だ。女はうつむき加減に歩んでいるので、顔がよくわからない。その傍で洋装の伝右衛門がステッキをしきりに左右に動かしている。癪うざ性なこんなしぐさは、日頃の伝右衛門にまことに似合わないものであった。

「まあ婿さんの嬉しがつて落ち着かんことというたら……」

サキのつぶやきも使用人には似合わないものであったが、ハル子が死んでから彼女が時々伝右衛門の寝間に呼ばれていることを家中の誰もが知っていた。

門の前の女たちと、伝右衛門とその花嫁の一行は次第に近づいてくる。初枝ははっきりと女の顔を見ることが出来た。まあ、なんとお雛さまそっくりな、と初枝はまず思い、いいや、そんなんじゃない、もっとそっくりなもんがあると声に出しそうになった。そうだ、あの入道いんどうだ。ご真影の中の皇后のお顔にそっくりだ。初枝は真面目な生徒だったから、上目遣いでこっそりとご真影

を見たことはない。それなのに皇后のお顔と、目の前の女の顔とは全く瓜ふたつだと空怖しい気分になる。

「ここがうちだ」

伝右衛門はステッキの先で、礎石の上に小さく丸を描いた。

「うちの者は後でひき合わす」

きちんと挨拶するつもりだった女中たちは、ここであわてて頭を下げた。

「長い旅で燐子は疲れちやる。すぐに部屋に連れてってやれ」

女たちはとっさに返事が出来ない。燐子と呼ばれた女があまりにも美しいのと、伝右衛門の女に対するいたわりの言葉を初めて耳にしたからである。

「なんね、なんね、あれ、なんね」

伝右衛門が出迎える男たちと座敷に入った後、若い女中たちはさっそく金次を取り囲んだ。彼は伝右衛門の甥で、八郎の兄にあたる。死んだハル子に子どもがなかったので、今の八郎と同じ年の頃に正式に養子縁組を交わしていた。

「ま、待っとれ、俺がちゃんと話してやるけん」

裏の伊藤商店事務所にも続いている台所は、使用人たちが食事をとれるように板の間を広くつくってある。その一角に腰をおろし、金次はラムネを飲み干した。

「全くおかしな嫁入りだったな。小竹からこっち、だあれも口を利かん。迎えに来たうちの男衆も何だかあの嫁さんにたまげて、しんとしちやる。八郎が甘えたような声出して近づいてったが、すげなくされたしな」

泣き出しそうに帰ってきた八郎を初枝は思い出した。

「静子はおとなしいから遠くで見てただけだが、おどおどしちよったな。まあ、お前たちもびっくりしたろうが、華族さんちゅうのは俺たちとは違うなア。汽車の中でも姿勢ひとつ動かさん」

このあたりでは「顎が多い」と言って、男の多弁は何より嫌われるのであるが、東京の明治大学に在学中の金次は、東京風の軽薄さをすっかり身につけている。

「まあなあ、金次さん。私らは何にも知らんとよ。旦那ちゃんが婚礼あげたってん聞いたは、四日前のことじゃったからなア」

女中のタネが膝を進める。

「村でもえらい騒ぎになったけどなア、はあ、華族のお姫さんをお貰いなさるとはなア、みんなたまげたわ。でも金次さん、私ら、華族のお姫さんと、いったいどう話したらいいんじやろう」

「華族のお姫さんちゅうてもな、妾の娘や」

金次は勝ち誇ったように言った。

「母親はな、芸者だちゅう話だ。まあ、俺らに起こるようなことは華族さんにもよく起こるんだわなア」

金次は修猷館中学時代、馴じみになった半玉との間に女の子をつくっている。タネよりはるかに古株の女中が、当時を思い出し含み笑いをした。

「妾の娘だからな、華族さんちゅうても価値は半分や。平民の出来のいいのと、ちようどっこいどっこいになるわ」

それは彼なりの庶民の論理というものである。しかしこの言葉で傷つく女が、この家には初枝